

本プロジェクトは、2023年の京都芸大崇仁地区への移転に向け、2020年度中の解体が予定されている崇仁小学校（2010年に閉校）に関する、記録（資料）と記憶の継承、ならびにその創造的な再活性化を目的として行っている。

崇仁地区は現在大きな転換期にある。今後の崇仁地区の担い手には、地域住民だけでなく、芸大の学生や教職員、芸術に関心をもつ多様な人びとがふくまれるはずである。したがってここで重要なのは、記録と記憶を、何らかの閉じたアイデンティティの礎としてのみ継承することではなく、地域の歴史にかかわる（やや）開かれた文化的・空間的・人的な資源として、創造的な感覚とともに感じとることであろう。あるいはその逆に、この場で行われていく創造的活動を、地域あるいは環境がもつ多様なレイヤーへと埋め返し、新たな記録と記憶の土壌にしていくことであろう。

記録と記憶の創造的な再活性化とは、このような、開かれた土壌としての地域資源の読み替え、あるいは転換可能性の拡張を企図するものだ。本プロジェクトが特に小学校に焦点をあてる理由も、学校という空間が、地域に深く根づきながら、同時に常に開かれたものであることにある。

こうした観点から今年度は、①崇仁小学校に保管・継承されてきた資料の調査と、②崇仁小学校校舎を使った資料展示を行う予定である（会期：2020年3月20日～31日、会場：崇仁小学校）。なお後述するように、崇仁小学校に関連する資料群は、体系的な整理が完了しているわけではなく、分散的に管理された状態にある。そのため、そもそも資料に「触れる」ためには、地域の人びとや資料を継承してきた団体・機関との信頼関係が必要である。本プロジェクトでは、地域の夏祭りや運動会などに参加して交流を深め、また研究の目的や内容を随時地域の団体や個々の方々に説明しつつ、活動をすすめている。

調査・活動結果について簡単に述べる。崇仁小学校に関する資料は、1) 京都府立京都学・歴史館、2) 京都市学校歴史博物館、3) 柳原銀行記念資料館、4) その他に、保管ないし一時的に継承されており、校舎内にもまだ一部残されていることが明らかとなった。1) は主に柳原小学校に関係する行政文書、2) は主に昭和初期の学籍簿や未整理資料、3) は主に山内政夫氏（柳原銀行記念資料館事務局長）らが整理・調査をつづけてきた資料群である。

年度末の崇仁小学校校舎における展示資料では、小学校を軸とした地域の記憶に関して特に重要だと思われる、3) の資料群を活用する。そこには、時々の教員の考えを記した文書、生徒や教員の写真、増築や改築を重ねた学校校舎の詳細な設計図、遠足やイベントのしおりなど、長い歴史をくぐりぬけながらこの地で行われてきた教育の足跡を思わせる資料が数多くふくまれている。これら資料の展示においては、柳原銀行記念資料館の山内氏、アーティストの伊達伸明氏、新キャンパス設計・リサーチチームの大西麻貴氏・榎原充大氏らと協力しつつ、資料整理と準備を進めた（この展示の詳細については、次年度別途報告書を作成する予定である）。

今後はひきつづき資料の整理をつづけるが、課題となるのは、変貌の渦中にある地域がどのようにその地域に関する記録と資料を継承する母体をつくり、記録と記憶の継承方法を編み出しうるかであろう。それはいいかえれば、ある記録・資料が、どのようにして「共有資源」となりうるかという問題でもある。

地域の人びとだけでなく、その場に新たに関わる人たちが、どのようにして「資料あるいは記憶の共有者」に、その資料を用いた、新たな「歴史の創造者」になりうるのか？ 大文字の歴史をめぐる行われてきた記録と記憶の篡奪をめぐる暴力を、あらためてここでくりかえすことなく、しかし誰かによって強制されるのではないかたちで記録と記憶をうけつぐにはどうすればよいのか？ そのための方法を発見する、あるいはつくりだすことが、今後の課題である。

